

〔直訳〕

- 38 言った 彼に ヨハネは、  
「先生、 私たちは見た ある者を  
あなたの名の中で 悪霊を追い出しているのを  
そして 私たちはやめさせようとした 彼を、  
なぜなら 彼は従おうとしなかった 私たちに。」
- 39 だが イエスは 言った、  
「あなたがたはやめさせるな 彼を。  
なぜなら誰もない  
ところの者は 行うだろう 力を 私の名の上に  
そして できるだろう すぐに 私を悪く言うことが。  
なぜなら ところの者は いない 反対して 私たちに、  
私たちのために ある。」
- 40
- 41 なぜなら誰であれ 飲ませるなら あなたがたに 水の杯を  
名の中で キリストのものであなたがたがあるという、  
ほんとうに 私は言う あなたがたに 次のことを  
決して彼は失わないだろう 彼の報いを。
- 42 そして 誰であれ つまずかせるなら  
一人を 小さな者の これらの「私を」信じる者の、  
よく ある 彼に もっと、  
もし まわりにある ろばのひき臼石が 彼の首のまわりに  
そして 彼は投げられた 海の中へ
- 43 そして もし つまずかせるなら あなたを あなたの手が、  
あなたは切り離しなさい それを。  
よく ある あなたが 体に損傷があつて 命の中へ入ることは  
よりも 二つの 手を 持って 立ち去ること ゲヘナの中へ、消せない火の中へ  
45 そして もし あなたの足が つまずかせるなら あなたを、  
あなたは切り離しなさい それを。  
よく ある あなたが 命の中へ入ることは、 足が不自由で、  
よりも 二つの 足を 持って 投げられること ゲヘナの中へ。  
47 そして もし あなたの目が つまずかせるなら あなたを、  
あなたは追い出しなさい それを。  
よく あなたが ある 一つの目で 神の国の中へ入ることは、  
よりも 二つの 目を 持って 投げられること ゲヘナの中へ、  
48 そこでは 彼らの蛆が 終わらない そして 火が 消されない。

〔新共同訳〕

38 ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」 39 イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。 40 わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。 41 はっきり言っておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」 42 「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。 43 もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。 45 もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。 47 もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。 48 地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。

①構成

① 38―41節には「名」が三度繰り返される。これに対して42―48節では「つまずく」が四度繰り返される。前半(38―41節)では、イエスの「名」との関係で、後半(42―48節)では、「つまずき」との関係で、弟子の取るべき態度が取り上げられる。さらに、内容から考えると、38―41節は38―40節と41節に分けられ、42―48節は42節と43―48節に分けられる。

② 38―40節

② この段落では38節四行目の接続詞は「だが」ではなく、「そして」である。「私たちは見たけれども、やめさせた」ではなく、「私たちは見て、やめさせた」と述べたのは、自分の行動の正しさに自信を持っているからである。

③ ヨハネはイエスの「名の中で」悪霊を追い出していた者が「私たち」に従わないので、やめさせたが、イエスは「私の名の上に」力ある業を行ってからすぐに悪口を言えないから、やめさせてはいけなさと教える。

④ 38節の「あなたの名の中で」は、「名によって、名を称えて、名を使って」の意味。39節の「私の名の上に」には「名を称えて、名を用いて、名(権威)に基づいて」の意味がある。

⑤ 41節

⑤ 弟子が弟子として受け入れられるのは、キリストのものであるという「名の中で」である。この「名の中で」は、「あなたがたがキリストに属する者であるという肩書(資格)において」、あるいは「…キリストに属する者という理由で」を意味する。

⑥ 42節

⑥ イエスを信じる兄弟、小さな者の一人を「つまずかせる」なら、大きな罰がある。

⑦ 43―48節

⑦ 自分を「つまずかせる」ものは捨て去るべきである。捨てることがむしろ命を獲得する道だからである。

② 反対者に対する態度（38―40節）

㉑ 「やめさせようとした」

ヨハネは、イエスの名を使って悪霊を追い出している者が「私たち」に従わないので、彼の活動を「やめさせようとした」とイエスに報告する。ヨハネのいう「私たち」はイエスをも含めた「私たち」であろう。並行箇所ルカ9章49節では「私たちと一緒にあなたに従わないので、やめさせようとした」と述べられている。彼は自分こそイエスに忠実に従う弟子と自負し、イエスと自分との間にみじんもすき間がなく、自分はイエスと同じ側に立つと思いついでいる。

㉒ 「やめさせるな」

しかし、イエスは「やめさせるな」とヨハネをたしなめ、彼の行動がイエスの望みにならなっていないことを明らかにする。イエスからみれば、ヨハネに従わない「彼」もまた弟子なのである。ヨハネは自分自身をイエスの直系の弟子と見て、自分と異なる意見を持つ者はイエスに敵対する者だ、と少しも疑わずに考えている。だが、イエスはヨハネとは違って、自分の名で悪霊を追い出した者は悪口をすぐには言えないし、自分たちに反対しない者は「私たち」の味方であるから、彼もまた弟子だ、と考えている。

㉓ やめさせる（コーリ्यूオー）

人物の行いや何かを「妨げる・防ぐ・禁じる」の意味が基本だが、何かを「拒む・否定する・認めない」を意味する例もある（ルカ6:29、使10:47）。イエス自身の名前を使っている以上、彼も味方の一人だと考えるイエスは、彼を「やめさせてはならない」と弟子たちに命じて、意見が違う者への寛容さを教える。この「やめさせてはならない」には「否定してはならない」の意味も響いている。

㉔ 弟子の間に争いが起こった時に取るべき態度

弟子の間の仲たがいは不必要な自負心から生じる。自分こそがイエスに従っているという意識が、他人を差別する心を生み、さらに自分の立場を絶対視する特権意識を育んで行く。しかし、弟子とは、考えや立場の異なる者をも、寛大に受け入れる者のことである。

③ 弟子として受け入れられる理由（41節）

㉕ 「キリストのものである」という名の中で

ここでは、弟子を受け入れる者の姿を語ることによって、逆に、キリストの弟子であることの根拠が語られている。弟子が水を飲ませてもらうとすれば、それはその弟子の能力によるのではない。むしろ「キリストのものである」という名の中でである。弟子が弟子であるのは、個人的な働きや能力のためではなく、キリストに属するという「名」が根拠となる。

④ 弟子が互いに取るべき態度（42節）

㉖ 「小さな者」

イエスを信じる小さな者の「小ささ」とは、イエスを高く崇めることによって生まれる小ささである。だから、イエスの前では、すべての者が「小さな者」として同等である。そのことを忘れ、自分の立場を絶対化して、イエスを信じる者を「つまずかせる」者は、大きな裁きを免れない。

㉗ 小さい（ミクロス）

㉘ 人の体格（背丈）や年齢の「小ささ」を表す。また、事物の大きさ・量・範囲が「小さい・少ない・狭い」、数が「少ない」。程度の弱さや少なさを表して、力が「弱い」。時間が「短い」の意味で用いられる。

④ 評価・価値・影響力・力量などを表す。マルコ9章42節では「わたしを信じるこれらの小さな者」と述べられているように、「小さな者」は、イエスを信じるキリスト者の呼称である(42節、マタ一〇42、ルカ一七2)。この「小さな者」を文字通りに解するなら「取るに足らない未熟な者」の意味になるが、イエスがキリスト者を「小さな者」と呼ぶときには、そうした軽蔑的な意味は含まれない。「小さい」は謙遜のしるしであり(マタ一八4)、この世では小さくとも、神の国では大きな者(偉大な者)である(マタ一一11、一八1以下、ルカ七28)。イエスにとって、最も小さい者こそが最も大きな者である(ルカ九48)。

⑤ 自分に対して取るべき態度(43―48節)

① 「手」「足」「目」が自分を「つまずかせる」ならば、それを切って捨てよ、との教えが繰り返される。ここで、「手」「足」「目」は、つまずかせるものを象徴的に表しており、文字通りに手や足を切り離せというのではないだろう。自分をつまずかせるものはすべて捨て去るようにと教えることに目的がある。

② つまずきの原因を除去する理由を述べて、「命(神の国)に入ることは、ゲヘナ(＝地獄)の中へ投げられることより良い」と教える。手や足や目は人間に必要なものであり、それを捨て去ることには大きな苦痛が伴う。しかし、苦痛がどのようなものであれ、神の国という命の世界に入るほうが良いに決まっている。

③ ゲヘナ(ゲヘナ)「ベン」ヒンノーム)

「ヒンノーム」の「子らの」谷」の意味。元は、エルサレムの南にあるヒンノームの谷のこと。異教の神への幼児犠牲が行われた場所であり、後に町の汚物、動物や罪人の死体をそこで焼却した。そのため、死後、悪人が罰せられる場所、つまり地獄の同義語となった。

⑥ イエスの名の上に立ち、イエスの名の中で生きる

① ヨハネは「ある者がイエスの名の中で悪霊を追い出している」のを見て、それを妨げようとした。ヨハネにはイエスと自分たちに従わないその者は、イエスの名を利用する者でしかない。しかし、イエスはそのようなヨハネの見方を否定して、彼は「私の名の上に」立って奇跡を行っていると言う。「名の上に」という句には、「名を称えて、名を用いて」のほかに「名(権威)に基づいて」の意味がある。ヨハネの言葉とイエスの言葉で、前置詞が変えられたことに意味があるなら、同じ出来事を見ている、そこに何を見いだすがヨハネとイエスでは異なっていることを示しているのかもしれない。

② 奇跡は「力」という語で表されるように、見えない神の力が見える形となって現れるものである。神の力を現すことは「イエスの名に基づいて」ということがなければ、行うことはできない。ヨハネが拒もうとしたある者は、イエスの名の上に立って、イエスの名を信頼して行動している限り、イエスの弟子である。

③ 弟子にとって捨て去るべきものは、まずは無用の自負心である。弟子が弟子であるのは、その人の個人的な能力によるのではなく、キリストの名がかぶされているというところにある。キリストのものであるという「名の中で」、弟子は弟子として受け入れられる(41節)。そのことをわきまえて、自分に罪を犯させるものを捨ててキリストに従う者は、神の国に入って命を得ることが出来る。神の国に入るのはまだ先のことというのではない。神の国とは神の支配のことであり、イエスの到来により、それはすでに始まっている。神の前に妨げとなるものを捨て去るなら、今、この地上にあつて、神の国がもたらす命の世界にすでに含み込まれている。